



TITLE:

松井君の思い出

AUTHOR(S):

田畑, 茂二郎

---

CITATION:

田畑, 茂二郎. 松井君の思い出. 経済論叢 1972, 110(5): 325-328

ISSUE DATE:

1972-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/133494>

RIGHT:

# 經濟論叢

第110卷 第5号

---

哀 辞

故松井 清教授遺影および原稿

産業コンツェルン.....	堀 江 英 一	1
創業利得と利益留保.....	高 寺 貞 男	27
不生産的階級と生存競争の組織化.....	池 上 惇	41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成.....	小 野 秀 生	57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格.....	成 瀬 龍 夫	78

記 事

松井教授逝く

追悼講演(吉信 肅・森下二次也・山岡亮一)

追憶談(田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明)

故松井 清教授略歴・著作目録

---

昭和47年11月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 追 憶 談

### 松井君の思い出

田 畑 茂 二 郎

わたくしが松井清君にはじめて会ったのは、昭和3年4月三高の文科甲類1年の2組に入学したときであります。クラス40名の中京都一中から来たものは7、8名ほどあまりいたでしょうか、松井君は附属の5年から一中に入り、一中の4年から三高に入ったわけで、クラスの中でも年齢的にはいちばん若かったわけですが、すぐクラスでもめだつ一人になりました。がり勉の秀才タイプでなく、だれにでも気楽に話しかける明朗闊達な性質の上に、気軽にいろんな仕事を引受け、入学すると早速5月1日の記念祭の準備のリーダーになるといった具合で、すぐクラスの中心人物の一人になりました。

彼のそうしたもち味をもっともよく示す事件が、2年のときに起きました。三高1年の時の日本史は中村直勝先生の講義でしたが、先生は、いわゆる概説ではなく、「吉田神道を中心とした座の発達について」という題で、座の発達をめぐって、日本の社会が中世から近世へ移る過程に興味深く話してくださいました。そうしたわけで、中学を出たばかりでいきなり大学院の特殊講義を聞いた感じで、みな急に偉くなったように思っておりました。ところが、2年になって六高から転任されて来られた宮崎市定先生、当時は先生が世界的な学者だといったことはまったく知る由もなかったわけですが、

その宮崎先生の東洋史の講義の最初の時間に、生徒の一人がなにを参考書に読んだらよろしいでしょうかと質問いたしました。きっとなにか難しい書物の名をあげられるのではないかと考えていたところ、案に相違して、先生は、中学校の東洋史の教科書がいちばんよろしいという答えをされたわけであります。1年で急に大人あつかいにされ偉くなったと思っていたところが、中学校の本をも一度読めといわれたわけで、みな自尊心を傷つけられ、そのうちに、いたずらな連中、その中には松井君も入っていたと思いますが、そういう連中が先生をいじめてやれということになり、次の時間に先生が教室に来られるとき、頭の上にラグビーのボールが落ちるように、ドアのところにしかけをいたしました。それが宮崎先生の頭の上にうまく命中したわけです。先生は教壇の上まで上られ、しばらくうつむいて考えられていたようでしたが、やや寂しそうな表情で、今日は講義をやめますといって、教室を出ていかれました。さあ大変だ、なんとかしなければということで、クラスの代表の松井君と北山茂夫君、かれは日本古代史の研究家として現在有名ですが、この二人が教室室へ行ってお詫びをすることになりました。ところが、間もなくニコニコして帰って来て、これから宮崎先生に毎水曜日放課後に中国の白文を習うことになったという報告をするわけです。聞いてみると、先生にお詫びに行き、お詫びかたがた、今後先生にいろいろと教えて頂きたい、それによって先生とクラスの連中とが親しく接触する機会を作りたいとお願いしたということで、それで先生から中国の白文を習うことになったというわけであります。大変な外交手腕だとクラス一同を驚かして驚いた次第であります。おかげで孫文がロンドンの清国公使館に監禁されたときの手記を白文で読むことができました。この事件は国際法の上でも有名な事件で、講義ではいつもこの事件について話いたしますが、国際法学者の中でもおそらくぼくが日本ではいちばんよく知っているのではないのでしょうか。これも松井君のおかげだと思います。

松井君は、前にも申しましたように、附属の5年から京都一中に入り、京都一中の4年から三高に入るという最短距離をとって来たわけですが、同じようなコースをとって来た諸君は、三高に入ると、とたんに元気がなくなるとか、あるいは、大学に進んでもまもなく病気になるというのが多かった中で、たくましくと申しますか、かれはむしろ年輩の諸君をもリードして、多方面に活躍いたしました。アンファン・テリーブールという言葉が、もっとも当たっているかと思います。勉強の上でもやや早熟で、大学の3年の頃、当時毎日新聞の京都版に学生論壇というのがありまして、これに当選いたしますと、当時のお金で10円の手当料がもらえました。10円という学生にとっては大金で、多くの連中が応募いたしました。松井君はいわば常連の一人で、仲々要領のいい、よくまとまった論文をたびたび載せてもらっていました。

松井君とわたくしは、学部こそ違いましたが、昭和9年に卒業すると同時に一緒に大学の研究室に残りましたので、その後接触する機会が多く、急速に親しくなりました。松井君は苦勞なしに育ったために、やや坊ちゃん的なところがないとはいえませんでした。それでいて、案外細かく神経を使うといったところがありました。また、かれからあまりじめじめしたぐちめいたことを聞くことがなかったのも印象に残っております。良い意味でオプティミストであったといってもいいかと思います。戦争中かれは7年もの長い間軍隊にとられていましたが、最初の召集のときにある事故があったため、かれはずっと兵卒の地位のままで、相当苦勞したと思うのですが、帰ってきたときにそうした辛かった話など全然しませんでした。しかし、そのように、オプティミストといった面がある反面、それでいて案外神経質に心を配り、人のために気を使うといったところがありました。自分の教えた人達のことや、大学のことなどにいろいろ心を配り、責任を感じていたようで、ときどきそういった問題についてもかなり突込んだ話をしてくれました。かれが60歳近くになって学生部委員になったのも、かれのそういった性格を経済学部の人達が認められていたからではないでしょうか。

かれは早く兄さんを失い一人で育った故か、人なつっこく寂しがりやの点があったと思います。大学で会いましても、いつもかれの方から話かけてすぐ立話をし、ときには研究室や楽友会館へまで足を歩んで話込むといったことが多うございました。そして、ときにはぼくを身内のように思っているのではないかと錯覚したぐらいに、立入った話をいろいろしてくれました。

松井君のすすめでぼくも野尻の大学村に小さな山小屋を建てておりますが、毎年8月の末に家内と一緒にそこへ参りますと、かならず松井君夫婦が訪ねてきてくれてあちこちを親切に案内してくれました。昨年はぼくがまだ行ったことがないというので、奥さんの自動車で黒姫シャレまでつれていってくれました。今年も8月25日の朝、家内と家の掃除をしておりますと、奥さんと一緒に「ヤア田畑いるか」と声をかけて訪ねてきてくれました。そして、高田に天ぶらの旨いところがあるからつれていってやろうということで、翌日朝10時半頃出発して奥さんの運転で高田まで行き、さらに、ぼくがはじめてだというので、昼食の後、直江津から日本海の海岸沿いに西の方向にかなり遠くまでドライブし、帰りには、かれの案内で漁師のおかみさん達が出している屋台店に立寄り珍らしい赤いかにを買い分けあいました。5時間ほどのドライブでしたが、その間、学部のことや自分の最近の仕事のことなど、話をするのはほとんど松井君の方で、元気に話しておりました。そして、最近ボーリングにこって、毎朝奥さんとボーリングに行っているが、そのためか身体の調子がとてもよいともいっておりました。まったく顔の血色は非常によく、家内など、ぼくより松井さんの方がずっと元気そうだといっていた

くらいでした。

実際に、最近の松井君は身体を大変いたわっていたように思います。以前は一緒に街で酒を飲みましても、かれは酒に飲まれる方で、ぼくがだいたい11時頃になると限度にきて帰ろうといっても仲々帰らず、放っておきますと深夜非常におそくなって帰り、奥さんを相当悩ましていたようでした。しかし、最近人は人が変わったように自己規律をし、街でほとんど酒を飲まなくなりました。昭和4年から7年にかけて三高を卒業した者で桜章会という会を作っていますが、その会合にも最近はまったく出てこなくなりました。このように身体をいたわっていた松井君が突然亡くなったわけです。

9月6日の昼すぎ、家に帰ったところ、家内が悲愴な顔をしていま木原さんから松井さんが亡くなれたと電話があったというのです。とるものもとあえず御池にある日赤の救急病院にかけつけましたが、入口で奥さんに出会い、お悔みをいおうといたしましても、ショックが大きかった故か声のどにつまってなにもいえないのです。そのあと暫らくして、遺体を家に運ぶため、タンカに移すのを手伝いましたが、ぼくのもった松井君の股のところは生きているのと同じようにまだ乗かでした。しかし、そこにみる松井君は、もはや野尻で元気に話かけていた松井君ではありませんでした。4カ月前の5月21日に、松井君の教えをうけた人達が催された京都ホテルの盛大な還暦祝賀会の席上、そのフィナーレをかざってみなで「紅燃ゆる」を歌いましたが、そのとき、松井君とぼくとが演壇に上り、肩を組み足をふみならしながら、音頭をとりました。あの時の元気で楽しそうだった松井君の姿が急に目に浮び、なんともいえない気持ちになりました。

松井君の冥福を静かに祈りたく思います。